

17 pinch-off により中心静脈カテーテルが離断され右肺動脈内に嵌入した再発大腸癌の1例

関根 和彦・長谷川 潤・萬羽 尚子
寺島 哲郎・島影 尚弘・内田 克之
岡村 直孝・田島 健三

長岡赤十字病院外科

症例は56歳、男性。S状結腸癌術後のリンパ節再発に対し右鎖骨下静脈から刺入された埋め込み型中心静脈カテーテルを用いてFOLFOX4レジメンにて化学療法が施行されていた。薬剤投与前の生理食塩水が滴下不良のためフラッシュしたところ右鎖骨下の皮膚が膨隆し、カテーテルの断裂が疑われ局所麻酔下にカテーテルを抜去した。カテーテルが短いと判断されたと判断し胸部レントゲン、CT施行したところカテーテル先端が右肺動脈内に嵌入していた。血管造影下にスネアカテーテルを用いて回収に成功した。

鎖骨と第一肋骨の間で挟まれること (pinch-off) が原因と考えられた。右鎖骨下静脈から中心静脈カテーテルを留置した場合 pinch-off によるカテーテル離断はまれながら起こりうる合併症である。中心静脈カテーテル留置による化学療法が増加しており注意を要すると考えられるため若干の文献的考察を加えて報告する。

18 多発肺転移をきたした直腸 sm 癌の1例

角南 栄二・黒崎 功*・畠山 勝義*
白根健生病院外科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科分野*

症例は51才、男性。

【既往歴】2001 (H13) 年より他院呼吸器内科にて右肺腫瘍 S5 のため経過観察中。

【現病歴】当院内科にて下部直腸に 3.5cm 大の O-II a+II c 型高分化腺癌を指摘され、2006 年 8 月上旬当科にて D2 郭清を伴う低位前方切除術を施行した。

【病理組織所見】sm2 adenoca. (tub1, tub2) ly1 vo pm0 dm0 n (-)。

【経過】術後4ヶ月の同12月他院胸部CTにてS5右肺腫瘍の他に右S2に一個10mm大の肺腫瘍を認め、2007 (H19) 7月同院胸部外科にて手術を施行。腫瘍はS5, S2の他にS9に計3個腫瘍を認め部分切除術を施行。病理組織診断ではS5は原発性肺癌でS2とS9は腺癌の転移であった。現在化学療法を施行中である。

【まとめ】遠隔転移をきたした直腸 sm 癌の稀な症例を経験したので報告する。

19 当科における Avastin の使用状況

岡村 拓磨・飯合 恒夫・伏木 麻恵
亀山 仁史・須田 和敬・丸山 聡
谷 達夫・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】当科における Avastin の使用状況について調査を行い、その問題点と今後の課題を検討する。

【対象と方法】2007年9月から2008年4月の間に当科で Avastin を使用した5例を対象とした。レジメン内容、施行回数、全身状態 (PS)、有害事象、効果などについて検討した。尚、有害事象については CTCAE ver3.0、PS は ECOG の criteria に準じて評価を行った。

【結果】対象症例の平均年齢は65才 (57-76) で、男性4例、女性1例であった。再発例4例、切除不能例1例であった。Avastin の平均施行回数は7.4回 (5-11) で、観察中央期間は84日間 (63-224) であった。導入時のPSは全例が0であった。導入時期については1st line として2例、2nd line として1例、3rd line としての使用が2例であった。投与量は5 mg/kg が4例、10mg/kg が1例であった。再発例の4例には前治療としてUFT, UFT/LV 錠, 5FU/1-LV が行われていた。Avastin 使用前の化学療法としてはIRIS, FOLFOX6 単独, FOLFIRI 単独であった。投与方法はFOLFOX6 との併用が4例、FOLFIRI との併用が1例であった。有害事象としては grade 3 の高血圧、血小板低下が1例、grade 2 の全身倦怠、白血球減少が1例でみられた。他 Grade 1 鼻出血

が3例で認められたが、生命にかかわるような重篤な副作用は認めなかった。副作用のため、2例で投与間隔の継続的な延長を必要とした。現在も全例がPS0である。中止例はなかった。症例数が少なく、また経過観察期間が短いため、奏功率の検討はできないが、3例で効果判定を行った。多発肝転移症例に1st lineでFOLFOXと併用(5 mg/kg投与)した症例では、2.3ヶ月間のSDだがRECISTで肝転移の20%の縮小を認めた。両肺、多発肝転移症例に1st lineでFOLFOXと併用(5 mg/kg)した症例で、7.0ヶ月間SDを保っていた。また両側肺転移、胸膜播種症例で3rd lineとしてFOLFOXと併用(10m/kg)した症例で、7.5ヶ月間のSDであった。

【結語】当科のAvastin投与に関しては生命にかかわるような重篤な有害事象は認められなかった。SD3例であったが、奏功率に関しては今後の検討を要する。

20 大腸癌化学療法の個別化とチーム医療

宗岡 克樹・白井 良夫*・佐々木正貴
 朝倉 俊成**・神田 循吉**
 若林 広行**・畠山 勝義*
 新潟医療センター病院外科
 新潟大学大学院消化器・一般外科学
 分野*
 新潟薬科大学薬学部臨床薬剤治療学
 研究室**

【目的】大腸癌の化学療法を個別化する際にチーム医療がいかに機能したかを検証する。

【方法】当院では癌化学療法サポートチーム(CST)が活動している。対象は2001年10月より2008年2月までの間にPMC療法(週1回5-FU 600mg/m²を午前9時から24時間かけて持続静注し、UFT400mg/day 週5日間経口投与を併用)あるいはFOLFOX療法を施行した切除不能・再発大腸癌30例であった。新潟薬科大学での血清5-FUの濃度測定により、薬剤の至適投与量を決定し、外来へ移行した。CSTが導入された2004年以前と以後で、予後に影響を及ぼした因子について検討した。

【結果】PMC療法のMSTは1st lineで19M、2nd lineで14Mであった。チーム医療により、患者ごとの副作用の早期発見やニーズの把握が可能となり、より個別的な対応(レジメンの変更および薬剤投与量の調整、栄養指導や医療費の自己負担額の通知)が可能となった。チーム医療によってMSTが35ヶ月と導入前の14ヶ月と比べて有意(P=0.0058)に延長していた。多変量解析では、PMC治療期間(p=0.0002)とFOLFOX療法の導入(p=0.0148)が有意に予後に影響していた。

【結論】大腸癌化学療法を個別化するうえで、院内でのCST、院外での新潟薬科大学とのチーム医療は有効であった。

21 下部直腸扁平上皮癌・肛門管癌に対する化学放射線療法

船越 和博・佐々木俊哉・佐藤 俊大
 本山 展隆・加藤 俊幸・瀧井 康公*
 松本 康男**・杉田 公**
 太田 玉紀***

県立がんセンター新潟病院内科
 同 外科*
 同 放射線科**
 同 病理***

【目的】リンパ節転移をともなう下部直腸扁平上皮癌・肛門管癌に対する化学放射線療法(CRT)の治療成績と課題を報告する。

【方法】対象は39-60歳(平均51.7歳)の女性3例。3例ともRb-Pの進行癌で、stage III b 1例、IV 2例であった。50.4-60Gyの体外照射およびlow dose FP療法(5-FU 250mg/m², CDDP 3 mg/m²)を併用した。

【結果】3例とも原発巣はCR、2例はリンパ節転移も消失し、CR 2例、PR 1例であった。有害事象はGrade IIの白血球・血小板低下、Grade IIの下痢・肛門痛であったが、許容範囲内であった。しかしCRの1例に再発を認めた。

【結論】直腸扁平上皮癌・肛門管癌はCRTの感受性が高く、肛門機能温存可能でQOLの点からも有用であり、CRTが第一選択の治療法となり得